

# ラザロ LAZARUS

2007(平成19)年9月17日鑑賞(試写会・大阪ビジュアルアーツ専門学校)

★★★★



監督＝井土紀州『「蒼ざめたる馬」篇—怪物マユミー』(40分)／製作＝京都国際学生映画祭2003運営委員会、スピリチュアル・ムービーズ／出演＝東美伽／弓井茉那／成田里奈／『複製の廃墟』篇—マユミの孤独—』(80分)／企画・製作＝スピリチュアル・ムービーズ／出演＝東美伽／伊藤清美／池淵智彦／小野沢稔彦／『朝日のあたる家』篇—マユミの誕生—』(81分)／製作＝伊勢映画人会、スピリチュアル・ムービーズ／出演＝東美伽／堀田佳世子／小田篤(『ラザロ』上映委員会配給／2007年日本映画／201分)

## 第4章

現実から目をそむけるな！

……これぞインディペンデント映画！ という問題提起作が11月大阪のナナゲイで大公開！ 「ラザロ」というタイトルに象徴されるとおり、3篇共通の主人公は女モンスターのマユミ。恋も愛も捨て、ただひたすら世界の破滅を狙う女マユミがなぜ生まれたのか、そしてまた殺人や通貨偽造を正当化する彼女の理屈(理論)の当否は？ 是非それを真正面から議論してもらいたいものだ。また女モンスターの誕生は三重県某市のシャッター街からだが、グローバリゼーションの嵐でとり残され、否応なく拡大した地方格差の中で生まれた悲劇とは……？ 3時間21分の間、あなたの頭をフル回転状態にして鑑賞してもらいたいものだが……。

## これぞインディペンデント映画！

商業映画に対置される概念がインディペンデント映画。京都の学生映画祭での映画製作という「無謀な企て」から、あれやこれやの企画が重なり、①『「蒼ざめたる馬」篇—怪物マユミー』、②『「複製の廃墟」篇—マユミの孤独—』、③『「朝日のあたる家」篇—マユミの誕生—』という3篇で構成されるインディペンデント映画『ラザロ LAZARUS』3部作が完成したというのは、まさに奇跡のようなもの。この手の映画は公開してくれる映画館がなかなか見つからないため、公民館などを使って自主上映をくり返していくというパターンが多いが、『ラザロ』は今年7～8月東京のポレポレ東中野でロードショーを大盛況のうちに終え、そして今般、他地方に先駆けて

11月大阪の第七藝術劇場で公開されるとのこと。

新聞紙上では全く情報を得ることができなかったそんなインディペンデント映画の試写が、9月17日（月曜日、祝日）1時から4時41分まで大阪ビジュアルアーツ専門学校で行われることに。3篇合わせて約3時間半という長編だが、午前中の1本（『恋とスフレと娘とわたし』）、夜からの1本（『題名のない子守歌』）の合間にしっかりと鑑賞。

試写会場は普通の映画館や試写室ではなく、学校ならどこにもある階段教室。前に机があるので、組んだ腕の上に顔をのせながら観ることができるのはいいが、イスが固いのが難点。そこに3時間半も座って観た「各界激震！」のインディペンデント映画の衝撃度は……？

## 「ラザロ」とは……？

この映画は、京都国際学生映画祭の映画製作という無謀な企てから出発したというだけあって、社会的アピール力もさることながら、学生らしいちょっと青い理屈(?)へのこだわりがあちこちに。その最たるものが3篇の総合タイトルである『ラザロ』で、これを見ただけでその意味するものをわかる人は千人に1人くらいしかないのでは……？

「ラザロ」とは、新約聖書の『ヨハネによる福音書』の中に登場する貧民の名前で、死後4日目にイエス・キリストによって復活させられた人物とのこと。また、ロシアの小説家レオニード・アンドレーエフの『ラザロ』という短編小説があり、アンドレーエフは甦った後のラザロの姿や生活をほとんど恐怖小説として描いているとのこと。ここまでは私は全く知らなかった知識だが、ドストエフスキーの小説『罪と罰』の中に、主人公ラスコーリニコフが殺人を自白する契機として、聖書の「ラザロの死とよみがえりの個所」を娼婦に朗読させる場面があることは私もよく知っている。

『ラザロ』は3篇の物語から成り立っているが、そのすべてに登場する主人公は、かわいい顔をした東美伽が演ずるマユミ。そしてこのマユミこそ、甦った後のラザロともいべき現代版の女モンスターなのだ。戦後62年間、平和の中で経済的繁栄を享受し続けてきたニッポン国に、なぜこんな女モンスター、マユミが生まれたのか？それがこの映画の統一テーマだとすれば、『ラザロ』というタイトルはまさにピッタリ！

## 🎬 『蒼ざめたる馬』のテーマは……？

金持ちを殺すことは正義なのか……？ ソーニヤに惚れて、結局自分の罪を認めてしまったラスコーリニコフは弱いのか……？ いかにも学生たちが好みそうな、そんなちょっと青臭い哲学論(?)が、主人公マユミの口から語られ、現実に行わせていくのが『蒼ざめたる馬』篇。『蒼ざめたる馬』篇のテーマは、現在の日本のはやり言葉となっている「格差」。

## 🎬 『蒼ざめたる馬』の登場人物は……？

映画の冒頭、思い詰めたような表情のマユミの顔がクローズアップされた後、ミズキ(弓井茉那)とリッコ(成田里奈)の姿がクローズアップされ、続いて浴室で溺死体となって横たわっている男の死体が映し出される。死体の男は、リッコがたぶらかして付き合っていた金持ちの息子の尚志。マユミをリーダーとする3人の女の子たちは、資産家の息子をたぶらかして殺害した後、その預金を引き出して自分たちの生活費にしていた。尚志の通帳には何と600万円が……。

## 🎬 『蒼ざめたる馬』にみるマユミ理論は……？

そんな犯行を正当化する理屈は、貧乏で前途有望な青年が生きていくために金貸しの老婆を殺すのは正当だという「ラスコーリニコフの理論」を現代ニッポン版に適応し、それをさらに発展させたマユミ独特の理論。すなわち、金持ちの息子の金を奪うことは、それだけで世の中の不平等、不公平を是正することだから善だという理屈……。

ミズキは今尚志の親友の陽介とつき合っていたが、陽介は尚志の姿が見えなくなったことを不審に思い、ミズキと一緒に尚志の部屋に行こうと言い始めたからヤバイ。そこでマユミは、陽介がどれくらい金を持っているのかのリサーチが不十分なまま、陽介の殺害を決意することに。しかし、この時既に陽介のことを好きになり、陽介との普通の幸せな生活を夢みる乙女の顔を見せたミズキは……？ ラスコーリニコフを徹底させた理論武装で固められたマユミに対し、ミズキは軟弱なもの。「何で！ 何で殺さなあかんの！」と質問するミズキに対して、マユミは「この世の中にはな、ステーキ食べて一生ぬくぬく暮らしていく連中もおればな、瓶のフタしゃぶりながら死

んでいく人らもおるんや！」と説得し、犯行に及んだが……。

## 『複製の廃墟』のテーマは……？

『蒼ざめたる馬』篇は思想的背景はともかく外見上は単純な殺人事件だったのに対し、『複製の廃墟』篇は大規模な1万円札の通貨偽造というとてつもない犯罪。スクリーン上には新聞紙面が再三登場し、あちこちで大量の偽1万円札が行使されている現状を伝えている。しかし、世界的なシンジケートでもあれば別だが、日本国内だけで、しかもマユミのような素人に毛の生えたような女の子たちのグループで、こんなとてつもない犯罪を行うのは現実問題としてはとてもムリ……？ したがって、80分という長尺で取り組んでいるものの、マユミが言う「一回全部キャラにして、この社会変えたいんです」という目的や、乗り込んできたベテラン刑事松村（小野沢稔彦）に対して言う「じゃあ、逆に聞きますけど、あなたたちが守ってるこの社会って本当に正しいんですか？ 1年に3万人以上の方が自殺するこの国は本当に正しいんですか？」との言葉と対比すれば、その犯罪のデカさはちょっと浮き気味……？

『複製の廃墟』篇でもマユミは、恋や愛とは縁を切った、目的のためには手段を選ばない冷酷な女として登場するが、相棒の女性ナツエ（伊藤清美）はそうでもなさそう。したがって、「好きとか嫌いとか、気持ちとか心とか、そんなもんでしか繋がれへん関係はとっくの昔に捨てたんや！ たとえ、心で憎しみあっても共通の目的のためなら一緒に行動できる、あたしはな、そんな絆しかいらんねん！」と叫ぶマユミに対して、「だったら、とんだミスキャストだよ。あたしはそんな機械みたいに割り切って生きられやしないし、あたしの身体には感情って奴がぎっしり詰まってるんだ」というナツエとの間に、仲間割れ寸前の論争(?)が展開されるが、それは彼女たちの世の中に対する怒りの表し方の相違によるもの……？

通貨偽造が成功すれば世の中の経済システムの根幹が揺らぐことになるため、これは大規模な経済テロだが、さてそれによって格差が是正されたり、貧乏人が幸せになる可能性が広がるの……？ そう思う私は、マユミが通貨偽造罪による経済テロについていかなる理論武装をしているのか、もう少し詳しい説明を聞かせてほしかったが……。

## 『複製の廃墟』における2人の刑事は……？

『複製の廃墟』篇には、モンタージュ写真の女ナツエを追うベテラン刑事の松村と新米刑事の相沢（池淵智彦）が登場する。物語のポイントは、ある日偶然交通事故の現場を目撃した2人が、遠くからじっとそれを見つめている白い日傘の女を確認したため、その目撃情報を得ようと相沢がその女の後を追ったこと。女は若い相沢がハツとするような美しさだったが、この女こそ稀代の悪女マユミだったから大変……。

こちらあたりのカメラ描写は、日本大学文理学部シネマ研究会などの協力を得ているらしいが、監督、撮影、照明などのスタッフが一体となって一生懸命取り組んでいる姿勢がハッキリとわかる、魅力的なもの……。もともと、偽造工場の従業員だった女は、いつも首にスカーフを巻いていたという情報が入っていたとすれば、相沢がなぜもっと早くマユミを追及しなかったのが不思議。まさかそこに私情が入っていたとは到底考えられないが、相沢の心の中にマユミに対するある種の感情が芽生えていたことはたしか……。

その結果、マユミがクロだという心証を得たらしい相沢は、ある独自の単独行動をとったが、それがまずかった……。やはり、刑事としては単独行動は御法度で、常に松村と行動を共にしなければ……。その結果、相沢の悲劇に続いて、あるネタを元に地道な足で稼ぐ捜査を続けていた松村も、マユミのスカーフに手をかけようとした瞬間、ナツエの拳銃によって倒されてしまうことに……。こんな2人の刑事の捜査のやり方を観ていると、映画上のストーリーとはいえ、かなり大きな問題点が浮かびあがってくるのだが……。

## 『朝日のあたる家』のテーマは……？

『バットマン ビギンズ』（05年）も『スーパーマン リターンズ』（06年）もそして『007/カジノ・ロワイヤル』（06年）も、シリーズ数作目にして主人公が生まれてきた原点を探るといふ企画だった。そして、この『朝日のあたる家』篇もそれと同じで、殺人犯、通貨偽造犯として大活躍している若き女モンスター、マユミがなぜそうなったのかという原点に迫っていくもの。

マユミの故郷は三重県にある某市。私は2000（平成12）年から2003（平成15）年までの3年間、三重県久居市の駅前再開発に関わる事件を処理してきたが、バブル崩

壊に伴う地方都市の再開発の惨状は目を覆うばかりだった。また、小泉改革の負の遺産と言われている、東京に対する地方の格差の拡大は今や大問題となっている。マユミの家はかつて華やかだった駅前商店街の中にあるが、今やそこは完全なシャッター通りと化しており、洋装店を営んでいたマユミの母親が病気になって死んでしまったのも、ダイニチという大手スーパーが登場してきたため……？ 今マユミはそんなまちで、昼は事務員、夜はスナックでバイトをしながら、絵描きになるために東京に行った妹直子（堀田佳世子）の成功を祈っていた。

『朝日のあたる家』篇のテーマは、そんな今最もホットなテーマである、地方格差と経済のグローバリゼーション。ちなみに、プレスシート（資料？）には「グローバル資本主義は、旧来の地域経済を破壊し尽くし、同時に地域の共同体をも破壊しきる。現在、日本の地方都市では、市街地の商店街や小売店はほとんど沈没し、郊外ではアメリカ型の大型店舗が隆盛の極みを見せている。それが日本のあらゆる場所で見られる現象である」と書かれている。そんなグローバリゼーションをどう捉えるのかというのが、『朝日のあたる家』篇のテーマ。

## 直子の夢とその挫折は……？

『朝日のあたる家』篇は、さびれた駅に1人戻ってきた直子が降り立つところからスタートする。突然会社を訪ねてきた直子にマユミはビックリしたが、聞くところによると、コネもカネもなく、逆にタツプリあると信じていた才能も人並み程度であることを悟った直子は、結局東京で絵描きとして成功するという夢に挫折してしまったというわけだ。

美大を卒業して1年や2年で夢を諦めるというのもどうかと思うが、たしかに直子が言うとおり、ちょっと引き立ててくれそうな人と一緒にホテルについていっても、そうスナリ画家としての成功が手に入るわけではないから、早く見切りをつけた方がいいかも……？ もっとも、夢を抱いて地方から東京に行き、さまざまな形で夢の実現を目指して生きていくというストーリーは、五木寛之の大河小説『青春の門』をはじめたくさんあり、必ずしも挫折モノばかりでないのも事実。

したがって、このマユミ vs. 直子の姉妹論争はどこにでもある身近なもので、若者たちの多くが関心をもつテーマだが、その突っ込み方がイマイチ……？

## 直子の怒りは正当……？ それとも逆恨み……？

『朝日のあたる家』篇で、直子から敵対勢力の代表(?)として目の敵にされ、結果的にとんでもない事件に巻き込まれていくのが、真面目なサラリーマンの梶川(小田篤)。梶川はマユミの恋人として結婚も間近のようだが、その梶川が旧ダイニチそして現在はカタカナ文字の大手スーパーの副店長をしていると聞いた直子は、「ダイニチいうたら、ウチの商売をダメにした張本人やん！ ウチの商店街があんなに寂れてしまったのも、お母ちゃんが病気になって死んだのも、ぜんぶあいつらのせいやんか！ その副店長と付き合ってるなんて、お姉ちゃんどうかしてるわ」と烈火のごとく怒ることに。さて、そんな直子の怒りは正当……？ それとも、「それは逆恨みや、あの人が悪いわけじゃない！」というマユミの反論の方が正当……？

自分のために姉妹が激しく対立していると知った梶川は、ある日自分の考えを直接話しかけようと試み、大店法から日米構造協議の話まで、そして現在自分の会社も外資からの吸収合併の圧力にさらされている現状を直子に説明した。その結果、それなりの理解を得たように私には思えたのだが……？

## こんな試し方をされたのでは……？

直子の「やっと本音吐いたな！ 妹が偉くなったら、それにぶら下がってラクが出来る、世間にええ顔が出来る、そのために今のうちに投資しておこう、しょせんお姉ちゃんの腹の中なんてそんなもんやと思ってたわ！」との言葉に対して、マユミは「あたしはな、今まであんたのために自分を犠牲にして生きてきたんや。そやから、あたしがどんな人と付き合おうと、その人がどんな仕事しよう、文句言われる筋合いはないわ！」と反論し、姉妹の対立は決定的と思える事態に……。ところが、翌日意外にも直子は素直に「お姉ちゃん、言いすぎたワ」と謝罪してきたから、「ああ、やはり妹も長年の東京生活で少しは大人になったんだ」とマユミは納得したが、実はそれはポーズにすぎなかったよう……？

「まだしばらく働かんでもいいヨ」とやさしい言葉をかけて、今日もマユミが会社帰りの後、夜のお勤めに出て行った後、もっと話を聞きたいと言って、梶川を自宅へ連れ込んできた直子は……？ ビールを出したりして何となく妖しげな雰囲気を感じながら観ていると、直子は梶川を誘惑するつもりであることは明らか……。正直、



お姉さんには飽きてきてるでしょう……」などと悩ましげに言いながら、身体をもたれかけられ、手と手がタッチしていくと、そりゃ……。

こんな試し方をされたのでは、多くの男が落とされていくのは当然だが、直子によって狙ったのは一体ナニ……？ そして、その結果生じてきた予想もしなかった結末とは……？ 多少ホラーめいた雰囲気も交えながら、なるほど、こういう体験をし、こういう生きざまを強いられてきたマユミなればこそ、現在の女モンスター、マユミになったのか、とあなたもきっと納得できるはず……？

### 井土紀州監督とは……？

プレスシートによるとこの映画を監督した井土紀州監督は、過去『雷魚』(97年)、『HYSTERIC』(00年)、『MOON CHILD』(03年)、『YUMENO ユメノ』(05年)など脚本作は優に30本を数えるが、監督作品は『百年の絶唱』(98年)、『LEFT ALONE』など数本。しかしそれらは、他に比すべきもののないインパクトを与えているとのこと。もちろん、私は今まで1本も観たことはないが、私が懇意にしている大阪の四天王寺にある應典院では、井土紀州監督とのトークイベントの開催を予定しているらしい。

三重県出身で1968年生まれの井土監督は、1994年からピンク映画を出発点としてシナリオを書き始める一方で、映画製作集団スピリチュアル・ムービーズを結成し、自主製作映画を作り続けてきたとのことだから、面白い人物であろうことは確実。機会があれば、是非個人的にもいろいろとディスカッションしてみたいものだが、彼が生まれた1968年といえば、1967年に阪大に入学した私が学生運動に最も精を出していた時期。このように約20年も年が離れていれば、その感覚もだいぶ違うと思うが、『LEFT ALONE』は日本の戦後左翼史を検証したドキュメンタリーとのことだから、ひょっとして話が合うかも……。もともと、1936年生まれで近々『実録・連合赤軍あさま山荘への道程(みち)』(07年)を発表する若松孝二監督ほどの、筋金入りの左翼思想の持ち主ではないと私は思っているのだが……。

### 「ナナゲイ」でも大ヒットしてほしいものだが……

今年の夏「ナナゲイ」は、『ひめゆり』(06年)、『ヒロシマナガサキ』(07年)、『TOKKO—特攻—』(07年)という3本のドキュメンタリー映画が久々の大ヒットと



なったとのこと。また聞くところによると、「シネ・ヌーヴォ」でも河瀬直美監督の『殞の森』(07年)が大ヒットとのこと……。シネコン全盛時代の今、大阪を代表するこの2つの良心的映画館が善戦しているのはうれしい限りだが、ナナゲイで11月に公開されるこの『ラザロ』は、さて……？

東京にはかつて学生運動を闘ってきた多くの団塊世代が生活しているから、ポレボレ東中野で『ラザロ』を上映すれば、あちこちからそういう映画を求めて観客が訪れてくるだろうが、そもそもその分母の少ない大阪では、さて……？ 今年『ひめゆり』『ヒロシマナガサキ』『TOKKO—特攻—』が大ヒットしたのは、学生運動あがりや団塊世代の支持だけではなく、広くあの戦争をもう1度振り返ろうとした多くの日本人がいたためだから、必ずしもそのヒットと『ラザロ』のヒットが結びつくとは考えにくいはず。

もっとも、『朝日のあたる家』篇が訴える、グローバリゼーションの悲劇や地方の格差というテーマは、今日本で最優先の課題だから、その論点をうまくアピールすればお客さんが集まるかも……。しかし、文学青年を気どって『蒼ざめた馬』篇の『罪と罰』やラスコーリニコフで売り込もうとすれば、それはきつとダメ。もっとも、意外なことに、現在「画期的な新訳 流れる物語 世界文学の最高峰がよみがえる！」という売り文句の中、光文社古典新訳文庫が大ヒットし、何と亀山郁夫訳によるドストエフスキー文学最大の難関『カラマゾフの兄弟』がバカ売れとのことだから、「閉塞ニッポン」では何が起こるか全く予測がつかないのが現状……？

ナナゲイは、そんなリサーチをあれこれとしっかりやったうえで、この『ラザロ』をロードショー公開し、大ヒットといかないまでも何とか黒字興行としてもらいたいもの。そして、私の書いたこの評論(ブログ)が少しでもその役に立てばうれしいのだが……。

2007(平成19)年9月18日記